

後期教養授業科目

「後期教養授業科目」は、東京大学の全ての後期課程学生に開かれた、専門家になると同時にその専門から抜け出す力をつけることを目的とした授業科目です。

文学部の学生のみならず、他学部学生の聴講を大いに歓迎します。

* 東京大学後期課程の皆さんへ 後期教養授業科目の案内

皆さんはこれから専門課程に進学し、専門教育を受けます。そして何らかの分野の専門家として生きていくこととなります。東大出身の専門家への世間の期待は大きいものです。卒業後にその荒波を生き抜いていくために、後期教養授業科目をお薦めします。

後期教養授業科目は、リベラルアーツの理念に基づいて開設されています。リベラルアーツというのは本来、「一般教養」の単なる同義語ではありません。ラテン語の *artes liberales* を英訳したものであるこの概念は、元来古代ギリシャに源流を有する考え方にもとづいたもので、人間が奴隷ではなく自立した存在であるために必要とされる学問を意味していました。現代の人間は自由であると思われていますが、実はさまざまな制約を受けています。日本語しか知らなければ、他言語の思考が日本語の思考とどのように異なるのか考えることができません。ある分野の専門家になっても、他分野のことを全く知らないと、目の前の大事な課題について他分野のひとと効果的な協力をするすることができません。気づかないところでさまざまな制約を受けている思考や判断を解放させること、人間を種々の拘束や制約から解き放って自由にするための知識や技芸がリベラルアーツです。

後期教養授業科目で伝えたいことは、「自分の専門が今の社会でどういう位置づけにあり、どういう意味があり、ほかの分野とどう連携できるか」を考える力です。専門知は、現時点で何が確実に言え、何が確実に言えないのか、その限界を正確に伝えられるものでなくてはなりません。同時に、現場にいる人の不安のなかで、問題をさらに聴き直し、別の専門家と共同できるものである必要があります。また、異分野のひとと対峙したとき、それぞれが無意識に依拠している「前提」に無自覚であると、思わぬ対立を生んでしまいます。問題が発生したときに、どんな時でも的確な判断を下すことのできる知性と感性をどのように磨くか。それが後期教養教育の課題です。

このようなリベラルアーツは、ただ多くの知識を所有しているという静的なものではありません。また専門分野の枠をただ越えるだけではなく、さまざまな境界を横断して複数の領域や文化を行き来する、よりダイナミックな思考が必要となります。ここで往復には二種類の意味があります。一つは、異なるコミュニティの往復です。たとえば他学部聴講は、出講学部のバックグラウンドをもつ学生のなかに、他学部のバックグラウンドをもつ少数の学生、つまりアウェイの学生が入ることです。アウェイの学生にとっては、ホームの学部とアウェイの学部を往復することにより、自らの専門性を相対化する機会が与えら

れることとなります。二つ目の意味は、学問の世界と現実の課題との間の往復です。これは文系理系を問わず、学問に従事する者の社会的リテラシー、すなわち自らの研究成果が社会のなかにどう埋め込まれ、展開されていくのか想像できる能力にあたります。

専門家になると同時にその専門から抜け出す力をつけること、それが後期教養教育です。教養教育の目的は「心を開くこと」(Open the mind)です。心を開くとは、1つの専門分野の考え方を一時的に括弧に入れ、自らの役割を見直し、メタの立場から再考することと言えるでしょう。皆さんが他分野や異文化に関心を持ち、他者に関心を持ち、自らのなかの多元性に気づいて柔軟な思考ができる素地を培うために、これらの科目は開講されています。